



京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

女子高生・車座フォーラム 2013



研究者や科学者の仕事を知ってもらおうと、12月15日(日)に、「女子高生・車座フォーラム2013」を開催しました。女性研究者支援センターでは、このフォーラムを年1回実施しており、今回で8回目となりました。

犬塚 典子・女性研究者支援センター特任教授による司会進行のもと、はじめに、稲葉 カヨ・副学長より、開会の挨拶がありました。

稲葉先生よりは、女性研究者支援センターが2006年に設立された経緯や、最初は、小規模に実施していた車座フォーラムを、規模を拡大して実施するようになったことの説明などがありました。



先生は、植物学を専攻したいと理学部に入学されましたが、大学院に進学されるときに、動物学教室に移られました。そして、現在のご研究分野は免疫学です。このように、大学で学び、研究を進めていく中で、やりたいことが変わっていくこともあると、ご自身の研究を例に紹介されました。

そして、女子高生に向けて、「Girls, be ambitious!」「チャレンジして失敗しても、それは経験である。成長こそが、あなたの方の目的である。」との言葉を贈られ、近い将来、このキャンパスで会える日を楽しみにしていると、話されました。



次に、赤松 明彦・学生・図書館担当理事・副学長より、「京大生の学生生活」についての講演がありました。

まず、京都大学の基本理念について、大きく2点の説明がありました。

1つ目は、「対話を根幹とした自学自習」です。自分の意見も言う。他人の意見も聞く。そして自ら学ぶという意味で、理事も好きな言葉だそうです。2つ目は、「地球社会の調和ある共存に寄与する」です。地球上には、人間だけでなく、多くの動植物が生きていることを認識し、環境に配慮しながら、共存していくための学問を追究する、という願いが込められています。

京都大学に入学した学生は、教養科目である全学共通科目と専門科目である学部科目を履修します。



理事よりは、本学で特徴的な、「ポケット・ゼミ」と呼ばれる少人数制のゼミの紹介がありました。さらに、「ジョンワプログラム」など留学のためのシステムも用意して、海外の大学と協力して、優れた教育を行っていることも紹介されました。

また、学問の面だけでなく、学生生活を支援するキャリアサポートルーム、カウンセリングルーム、障害学生支援ルームなどを設置していること、芸術鑑賞の機会を用意していることなどが話されました。

学生は、自主的に種々のクラブ活動やサークル活動を行っていることに触れ、「京都大学で充実した学生生活を送られることを願っています。」と参加者にメッセージを贈られました。

続いて、鈴木 晶子・教育学研究科 教授より「自分の未来をデザインする」の講演がありました。

はじめに、鈴木先生より参加者にいくつかの質問が投げかけられました。参加者の中には、文系・



理系の別だけでなく、入学を希望する学部が、明確に決まっている人もいれば、まだまだ迷っている人もありました。先生からは、「大いに迷って下さい」とのお言葉がありました。なぜならば、研究には、文系・理系の区別なく、多くの分野の方々と関わることが必要だからです。どの学部に入るか、文系・理系を選択するか、というのは、学問への入り口でしかなく、凝り固まっては、ユニークな研究ができないからだそうです。

先生は、高校生の時から、研究者志望だったそうです。人の集中力が日によって違うことが不思議であったこと、「ひらめき」が人に訪れる仕組みを考えたいと思ったとき、医学、心理学、哲学など、どの学問で学ぶべきか迷ったそうです。大学院生時代にドイツのケルン大学

京都大学を知ろう 研究者と語ろう

に留学し、学問を進める中で、「人の意識が、どのようにして、人を成長させるのか」を教育哲学という視点から研究することに興味を持ったそうです。

女性が研究職という専門職を続けるためには、結婚や出産・育児、親の介護など、様々な事象に出会いますが、そこでは、研究を続けていくための環境を整えるというマネジメント能力も求められます。先生は、協力者を持つこともマネジメント力の一つであると話され、自分の応援団を持つために、何が必要で、何をしなくてはならないか、考えてみましょうと話されました。

最後に、参加者に向けて、「自分たちには未来をデザインする力があると認識し、自分の心の中に流れている時間の質を高めましょう。才能は愛することで、伸ばすことができるのだから、そのための意識を育てましょう。そして、皆さんと、このキャンパスで、様々な議論ができる日を心待ちにしている」とのメッセージをいただきました。

講演後は、午後のグループ討論に向けて、講師とアシスタントの学生の紹介を行いました。

昼休憩後、高校生は、グループ討論会場に移動し、9グループに分かれて、討論を行いました。グループ討論では、講師から、研究と育児の両立のために、時間の使い方を工夫する能力が増したという話や、研究を続けていて良かったと感じたときの話を聞いたり、学生スタッフから、受験勉強の方法や、受験学部を選択、講義の様



子を聞いたりしました。高校生がグループ討論に参加している間、保護者は、学生ガイドの案内で、キャンパスツアーに参加し、京都大学の施設や、博物館の見学をしました。



2013年12月15日(日) 芝蘭会館、他

グループ討論の後には、もう一度全員が集まり、伊藤 公雄・女性研究者支援センター推進室長の司会で、全体会を行いました。まず、アシスタントの学生より各グループの討論内容について発表を行い、講師が高校生からの質問に答える形でまとめを行いました。



自分のやりたい学問は、どの学部に行けば、できるのか知りたいということに対しては、方法は複数あるので、学問を進めていく中で、研究の方向性や、研究環境を選んでいけばよい、ということが確認されました。

女性研究者に向けて、なぜ研究者になったのか、女性であるがゆえに困ったことは何か、という質問もありました。研究者を目指して学問を続けてきたというより、好きなこと、やりたいことを「もうちょっと」と続けて

いるうちに、今の状況になったという回答が多数でした。研究者カッパルは別居婚が多く、子どもがいると、パートナーや、親、周囲の協力が、より必要になってきますが、価値観を共有できるパートナー探し、ポイントになるようです。親から「娘に養ってもらうつもりはない」と言われ、自由に研究を続けられたのは、女性ゆえのメリットだったと思う、という意見もありました。

また、男性研究者に向けて、女性が育児や家事で研究を中断しなくてはならない状況をどう思うか、女性研究者は、男性からどう見えるか、という質問もありました。両立している女性は、時間の使い方がうまく、協力者に恵まれ、環境を整える力があるように思うとの回答がありました。やはり、お互いのライフスタイルを理解し合えるパートナーを選ぶことが必要ようです。

最後に、京都大学では、まだまだ女性研究者が少ないのですが、もっと、女性が活躍できる場に行きたいとの抱負が述べられました。(支援室)

講師・グループ・グループ討論会場

氏名	所属	研究分野	会場
1 伊藤 公雄	文学研究科	文化社会学、メディア研究、ジェンダー論	別館2階 研修室1
2 犬塚 典子	女性研究者支援センター	教育行政学	女性研究者支援センター
3 常見 俊直	理学研究科	素粒子物理学	別館2階 研修室2
4 栗屋 智就	医学部附属病院	小児神経学、発生生物学	本館2階 山内ホール
5 矢野 育子	薬学研究科	医療薬学	別館地階 会議室
6 山肩 洋子	情報学研究科	マルチメディア情報処理	別館1階 和室1
7 落合 久美子	農学研究科	植物栄養学、土壌学	G棟セミナー室1
8 工藤 春代	農学研究科	農業経済学	G棟セミナー室2
9 稲葉 カヨ	生命科学研究科	免疫学	G棟セミナー室3

学生スタッフ

氏名	所属
1 下原 直緒	文学部
澤崎 拓真	文学部
富野 瑞葉	法学部
2 込森 実奈	法学部
及川 陽太	経済学部
鈴木 慎介	文学部
3 半場 悠	理学部
渡邊 達彦	理学部
4 西尾 周朗	医学部
野原 静華	医学部
5 高見 理沙	薬学部
土橋 泰成	法学部
6 秋津 裕	エネルギー科学研究科
福富 雄一	理学部
井上 史嵐	経済学部
7 香月 和敬	農学部
磯田 珠奈子	理学部
8 柘植 仁美	農学部
中野 さゆり	医学部
菊地 淳彦	経済学部
9 向平 妃沙	医学部
金岡 歩美	理学部



プログラム

10:15-10:25	開会の挨拶 (副学長 稲葉カヨ)
10:25-10:45	京大生の学生生活 (理事 赤松明彦)
10:45-11:15	自分の未来をデザインする (教育学研究科教授 鈴木晶子)
11:15-11:45	講師紹介、グループ討論用質問用紙記入
11:45-13:00	昼休憩
13:00-14:30	【高校生】グループ討論 【保護者】キャンパスツアー
14:30-14:45	全体会場へ移動、全体会用質問用紙記入
14:45-16:05	全体での話し合い
16:05-16:30	アンケート記入・回収
16:30	解散

連載：研究者になる！－第45回－

夢中になるとは

地球環境学 助教
落合 知帆



アメリカの大学で社会学を専攻し卒業後、アルバイトとして開発コンサルタントで働く機会を頂いた。初めは英語が話せる雑用から始まり、ベトナムやブラジルでの下水道整備事業のコーディネーターとして採用していただき、現在の防災研究につながるプロジェクトに携わった。7年間、コンサルタントでの業務で海外経験を積んでいくが、次第に専門性が問われるようになり、また、その頃から社会配慮がプロジェクトの中に取り込まれるようになり社会的専門性が必要となってきた。社会分野を担当するものの、その手法や結果に不満と不安を感じていた。「もっと専門的な知識を得なければ」そんな気持ちから、30歳を機に地球環境学舎の修士課程に入学することにした。修士課程を終えたら会社に戻るつもりが、もう少し学びたい、専門性を身に付けたい、もっと深く考えてみたいという気持ちから博士課程に進んだ。

博士課程では、途上国支援の現場で行われているワークショップ型の防災教育に疑問を持ち、日本の伝統的な自主防災を研究した。漁師町や山間部集落の人々の生活を見聞きし、消防団を追っかけ、漁師たちの納屋でお酒を飲みながら祭りを観察し、ご親切にも宿舎を提供して下さる住民の方の家でくつろぐ生活を、それ以来過ごしている。博士論文をまとめるに当たっては、既に現在の職に就いていたので研究室所属の学生たちの生活や論文のお手伝いをしながらではなかなか集中して分析作業や執筆に取り組みせず、論文の不採用通知を受け取る日々の中で精神的に落ち込んだり、涙が出たり、食べ過ぎたり食べな過ぎたりで体重が大きく変化するときもあった。そんな時に私を支えてくれたのがフィールドでお世話になるおじさんやおばさんたちだった。漁師の親方は人の上に立つことの難しさや、運命・宿命について話してくれたこともあった。フィールドのお母さんがおいしい太刀魚の梅干煮とおかゆを作ってくれたこともあった。そんな皆さんの支えがあって、私は今でもこの研究を続けていられる。

私も未だに「研究者とは」何かがよく分からない。ただ、お世話になった皆さんにどのような恩返しができるのかを考えるようにしている。私を指導して下さった教授の先生は、私が論文執筆で足踏みをしている時に、「自分が文章を作ろうとするから進まない。彼らが言ってくれた言葉を素直に書けばいい」とよく言ってくださった。私は、私が知り合った普通の、しかし喜びと楽しみと問題とに溢れた人達の生活を記録し、そこに日常と災害との関わりや防災の学びを見出していくことが研究だと考えている。京都大学で知り合ったある教授の先生が、小さな貝やら虫をたくさん集めていて、それを「見てください、こんなにいろんな種類があるんですよ」と見せてくれた。私はその先生に「研究ってどうしたらいいんですかね?」と聞かけると、その先生は「夢中になることでしょ」と教えてくれた。私はそこに住む様々な個性あふれる人間に夢中なんだと思う。そしてその人達がどのように地域で生活し、そして災害と関わりを持ちながら、また影響されながら生きているのかを少しでも理解したいと思っている。

現在、京都大学若手人材海外派遣事業「ジョン万プログラム」に採用していただき、カリフォルニア大学バークレー校に客員研究員として席を置いている。約20年前に起きた火災後のコミュニティ再建と自治会の役割についてこの1年をかけて調査研究する予定だ。個人的な経験をインタビューしたり、図書館にファイルされた過去の新聞記事の一つひとつを読んだりと貴重な時間を過ごしている。また、定期的に行われる諸外国からの研究者の研究発表や議論を聞くのも大変勉強になる。1年という長いようで短い期間で自分に何ができるのかを悩みつづ、学際的な環境の中で何か方向性を見出したいと考えている。

最後に、私は京都大学内で女性研究者採用促進に関わった諸先輩・諸先生方の理解と努力のお陰でこの職に就くことができた。アメリカの大学は女性教員の比率が高く、また男性教員の女性教員に対する意識も協力的で尊重されていると感じる。京都大学においてもこのような環境が築かれることを望む。



Center for Women Researchers

〒 606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>